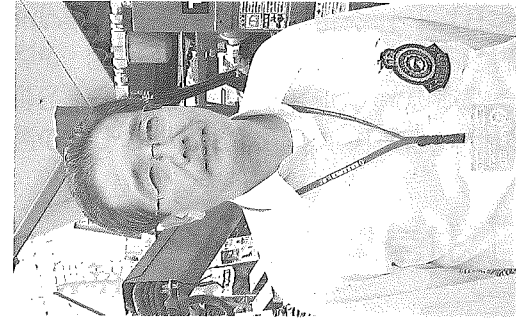


食の大地

自動

国際農業機械展実行委員長

山田政功氏に聞く



時代の要請に応えたい

国際農業機械展について、実行委員会の山田政功会長（東洋農機（帯広市）社長）に開催の意義などを聞いた。

国際農業機械展は、1947年に開催された「自由市場交換即売会」の流れをくむイベントで、82年から4年に1度の開催になりました。これに合わせて新たな機械が

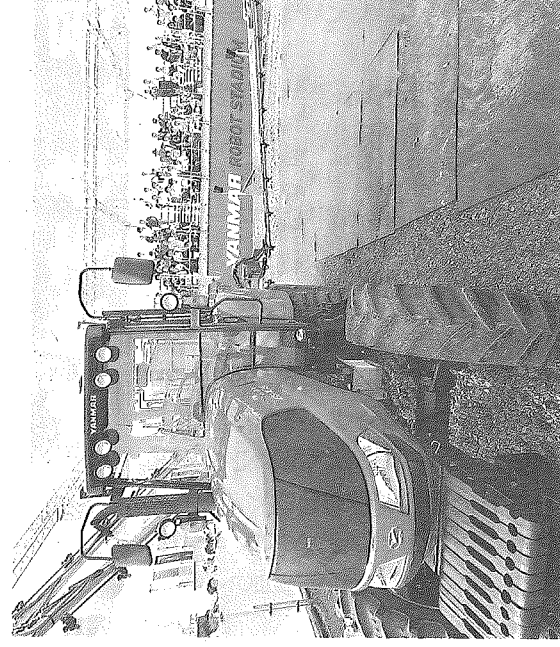
開発されるなど、メーカー同士の切磋琢磨の場にもなっています。2010年の前回は口蹄疫などで中止となり、今回は8年ぶりの開催となりました。

今回は出展者数などが過去最大となり、農業機械の進化を実感できました。トラクターの大型化や機器に取り入れられたIT（情報技術）の進歩には目を覚ますものがありました。

高齢化や担い手不足、農場の大規模化、環太平洋連携協定（TPP）参加による競

争激化の懸念など、地域の農業は厳しい情勢にあります。今回出展された最新鋭の機器は、今求められる省力化や規模拡大をどう進めるのか、時代の要請にマッチするものでした。われわれメーカーは農家があつてこそ生きることが出来ます。今回の農機展が進むべきか止まるべきかで悩む農家の前向きな気持ちを引き出すきっかけになれば幸いです。

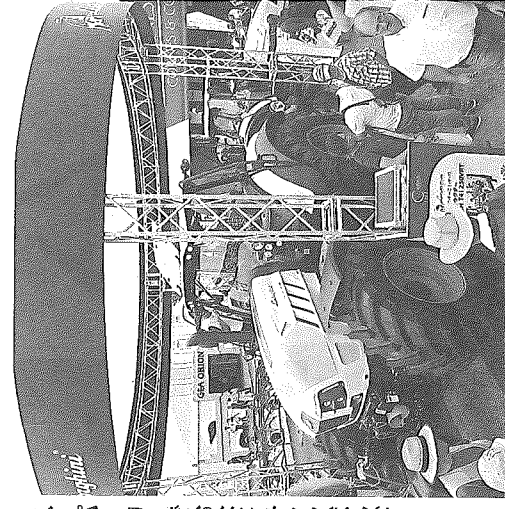
◇おことわり 「逸品ストーリー」は休みました。



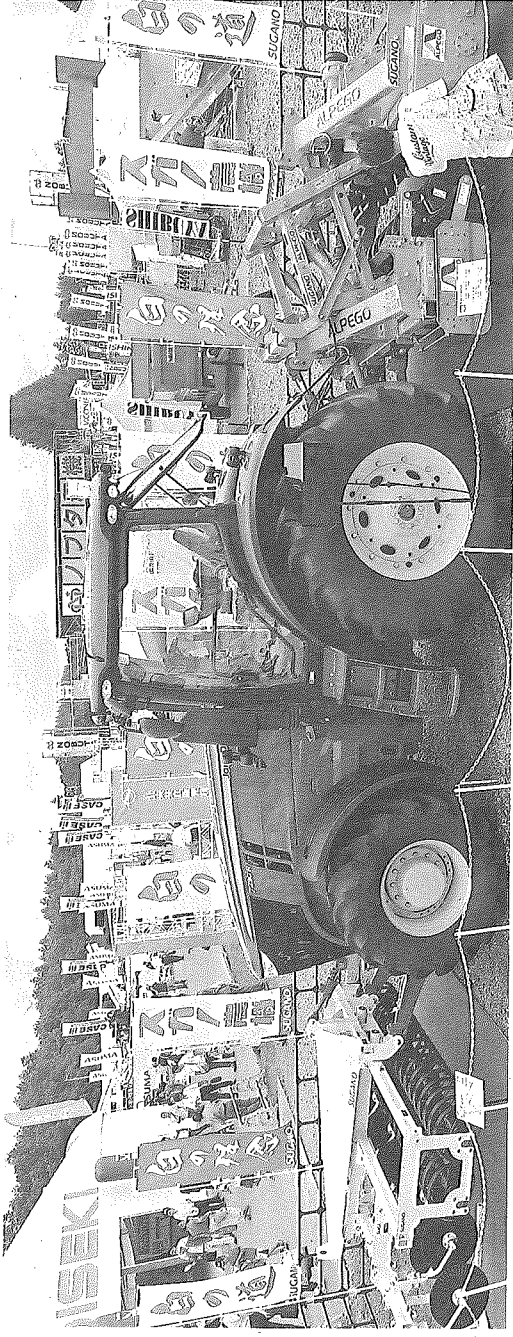
無人のまま場内をぶつからないように走り、薬剤散布も自動的に行えるヤママーのロボットトラクターのデモ走行

農機

スポーツカーでもなじみ深いボルソ二のトラクターは来場者の注目の的。イタリアのスポーツカーデザイナーが車体や運転席の設計を手がけた



スガノ農機の複合作業システム。トラクターの後ろだけでなく、前にも機器を付け、効率化を図る



サカエ農機の豆類収穫機は半世紀で効率が5倍に進化。けん引式だけでなく、自走式の機械の開発も進めている



牧草ロールを作るIH115。直径を自在に変える機器。多様化する需要に

対応することで、従来の機器を付け替えるから3〜4回に分けて行っていた作業が1回で済み、畑へのダメージを最小限に抑えられるという。トラクターの前に装着する機器は欧米メーカーが強いが、国内メーカーで造るのは同社だけという。担当者は「作業を大幅に効率化できます。後側の機器は手持ちのものを利用してできるので、投資額も抑えることができます」と話す。

IH115スター（千歳）は牧草をロールにしてビニールシートで密封する「可変径ロールドライバー」を展示した。牧草ロールの直径を85〜110センチの範囲で自在に変えられるのが特長だ。生物系特定産業技術研究支援センター（さいたま）と共同開発したもので、酪農農家ごとに異なる大きさのロールの発注に対応しやすくなっている。

半世紀以上製作してきた豆類収穫機「トランスレッシュャー」の改良版を出展したのは、地元のカカエ農機（十勝管内音更町）だ。かつては1日0.3畝だった収穫能力は最新型では同1.5畝まで向上し、金時や小豆、手しなどあらゆる品種に対応できる。さらに効率がよい自走式の豆用コンバインも参考出展しており、衣原敏博社長は「多様化するニーズに技術で応えるのがメーカーです」と話している。

運転 / 畑傷めぬ工夫 / 収穫能力5倍

こまで進化

帯広で国際展 道内メーカーも存在感

帯広市の郊外で今月10～14日、国内最大規模の「第33回国際農業機械展―帯広」が開かれた。8年ぶりの開催で、国内外の119社・団体が最新鋭の大型トラクターや農業用機器など約2千点を出展した。後継者難や環太平洋連携協定（TPP）交渉など農業を取り巻く環境が変わる中、省力化や効率化の技術が注目され、会場は大勢の農家や市民でにぎわった。国内外のメーカーがしのぎを削る最先端の農業テクノロジーを紹介しよう。

（経済部 米林千晴 帯広報道部 紺山国敏）

約1日の会場でひとまわしを注ぎられたのは、農業機械大手ヤンマー（大阪）のブースだ。観客陣付きの仮設スタジアムで、北大学院農学研究院などと共同開発中の「ロボットトラクター」のデモンストレーションを行った。

赤い無人のトラクターがひとりで動き、農地に見立てた場内を一回り。途中で薬剤散布用のアームを自

動的に伸ばして農業代わりの水を噴射すると、見守る農業関係者からどよめきが漏れた。

衛星利用測位システム（GPS）で位置を確認し、パソコンで入力した動きを忠実に再現する自動運転システムを搭載する。衛星などで畑の状態を見極め、ピンポイントで施肥や農業散布量などを自動調整することもできる。

ヤンマーアグリシヤパン北海道法人代表の杉山宏二執行役員営業本部長は「トラクターの機器を付け替えば、すべての農作業を自動化できる。熟練の技も必要なく、少ない人教でも広大な面積を管理できる」と強調する。2年後にも発売する方向で、価格は「標準モデルの1.3～1.5倍ほどに抑えたい」（杉山本部長）。

もうひとつ、多くの人だかりができたのがイタリア・ランボルギーニのトラクターだ。「カウンタック」などのスポーツカーで知られる会社だが、実はその始まりが農機メーカーだったことは農業関係者にはよく知られている。

最新型トラクター「MACH」は流線形の車体に国産にはない203馬力の強力なエンジンを搭載。高級車並みのオートエアコンやステレオなどを備えた運転席では、前後に取り付けた機器をワンタッチで操作できるタッチパネルや、ゲーム機のジョイスティックのようなコントロー

ルバーが目を引き。GPSを併用し、畑の形に合わせて自動的に機器を上げ下げする機能も持たせられる。価格は約270万円。スポーツカー並みだが、出展した輸入代理店「コーズ・エーシー」（帯広）の担当者は「指名買いする農家も多い」と話す。

国内大手や海外メーカーの華やかさに、道内メーカーも負けてはいない。北海道農業機械工業会（札幌）によると、道内の昨年の農機出荷額は約600億円。このうち道内メーカーのシェアは200億円ほど。地の利を生かし、畑作業の機械を中心に農地に合わせた機具の細かな改良や丁寧なサポートが売りの



ターのことがいえる